

CFO Letter

IFRS 導入を終えて

三菱商事(株) 代表取締役
常務執行役員

うちの しゅうま
内野 州馬



1. はじめに

当社は本年6月30日に、IFRSに基づく初めての有価証券報告書を提出した。これまで40年以上にわたって適用してきた米国基準に別れを告げ、IFRSに移行したわけだが、時代と共にグローバルスタンダードが変わっていくことを改めて実感しているところである。

2009年にIFRS導入のプロジェクトを開始してから約5年、その間に日本や世界におけるIFRSを巡る状況は刻々と変化し、今もまさに変化の只中にあるが、プロジェクトを中断することなく無事に新たなスタートを切ることができたことを素直に喜びたい。

本稿では当社のIFRS導入プロジェクト、及びIFRS導入企業として抱えている問題意識をご紹介しますことで、IFRSの導入を検討されている企業の皆様の一助となれば幸いである。

2. IFRSの導入について

① IFRS導入の背景

当社がIFRS導入を検討し始めた2009年は

まさに激動の年であった。

まず同年6月に、金融庁より「我が国における国際会計基準の取扱いについて（中間報告）」が公表され、本邦上場企業について、早ければ2015年よりIFRSが強制適用される可能性が出てきたのである。また、米国でも国内の上場企業について、早ければ2014年よりIFRSが強制適用される方向で検討が進められている状況にあった。

さらに同年12月に、内閣府令第73号により連結財務諸表規則が改正され、米国基準について、2016年3月31日までの使用期限が設けられた。これにより、当時米国基準を適用していた約40社の企業は、日本基準かIFRSかいずれかに基づく連結決算に切り替えることを迫られたのである。

海外約90か国とグローバルに事業展開し、800社を超える海外関係会社を抱える当社にとって、当時既に世界100か国以上で使用され、会計基準のグローバルスタンダードとしての地位を確立しつつあったIFRSを選択することは、極めて自然な流れであった。

実際、当時の当社連結純利益において、豪州を中心としたIFRS導入国に存在する関係会社が占める割合が約5割を超えている状況にあっ

た。

このような状況下、当社は、2010年3月に2013年度の連結決算よりIFRSを導入する前提で、IFRSに基づく経営管理体制の整備に着手することを機関決定し、IFRS導入の検討を本格的に開始した。

その後、本邦上場企業に対する強制適用の議論は中断され、米国基準の使用期限も撤廃される等、外部環境は大きく変化したものの、当社の連結子会社の約半数がIFRSを採用可能な国に所在し、当社にとって会計基準のグローバルスタンダードといえ、さらには関係会社自身がIFRSを採用することにより共通の「ものさし」で当該会社の経営から当社連結グループでの経営管理まで一貫通貫で実施することが可能であることから、2013年12月に当初の予定どおり2013年度の連結決算よりIFRSを導入することを機関決定した。

② 導入プロジェクトの概要

当社は、IFRS導入について具体的な検討を進めるために、2009年に専任プロジェクトチームを設置した。社員やCPAの意向者を含め総勢5名で始まったチームは、その後人員の入れ替えもありながら、5~6名程度のメンバーで検討を推進してきた。

また、プロジェクトの推進に当たっては、会計方針の検討、会計マニュアルや実務インフラの作成、システムの改修・再構築、国内外の関係会社向けの説明会開催等、膨大な作業が必要となるが、内部人員のみでの対応には限界があるため、外部のアドバイザーも起用し、一定期間当社オフィスにプロジェクトルームを用意し、常駐してプロジェクトに参加していただいた。

プロジェクトはまず、本社及び主要関係会社を対象とした影響度調査から始まった。ここでは、IFRS導入に向けた課題やその難易度を見

極める目的で、米国基準と差異があるIFRSの各会計領域について、会計基準変更による影響度を調査した。約4か月を要した調査の結果、一部の会計領域においてシステムの改修・再構築が必要となる点を除き、大きな問題が認められなかったのは、ほぼ想定どおりであった。

次に、社内関係部局から数人ずつのメンバーを集めて個別の会計領域ごとにワーキンググループを組成し、具体的な検討に着手した。ワーキンググループでは、約4か月間をかけて特に実務上影響が大きいと考えられる会計領域について、該当取引の有無や会計方針の決定に当たって留意すべき事項の洗い出し等を行った。

その後、影響度調査の結果やワーキンググループでの検討事項を踏まえて、会計マニュアルや、関係会社から情報収集するためのツールといった経理インフラの整備を進め、別途組成したタスクフォースを通じて関係部局へ展開していった。

ここで留意したのは、会計基準を変更することに対する抵抗感を低減するという点だ。40年以上慣れ親しんできた米国基準からIFRSへ変更することは、会計処理への影響が限定的であったとしても、経理に携わる者であれば誰でも大きな抵抗感を伴うであろう。特に、国内外の関係会社が多い当社においては、本社だけでなく、関係会社の経理担当者の理解を得ることも求められる。

このため、大枠の会計方針が固まった後は、本社及び国内関係会社の経理担当者向けに64回、海外関係会社の経理担当者向けに60回もの説明会を開催し、IFRSの概要や個別会計領域の詳細を説明して回った。また、IFRSに関して事細かなルールを纏めた冊子を作成の上、本社及び関係会社の経理担当者に配付した。

さらに、説明会や冊子だけでは本当の意味でのIFRSの理解・浸透は図れないとの想いか

ら、対比計数となる2012年度の数値を作成する際に、本社の各経理担当部局にプロジェクトチームのメンバーを常駐させ、きめ細やかなフォローを心掛けた。

こうした地道な努力の積み重ねによって、本年6月末に有価証券報告書を無事に提出することができたのである。

3. IFRS 導入の意義と狙い

当社のように多くの海外関係会社を抱える企業にとって、IFRS 導入のメリットは大きい。

従来当社が採用していた米国基準は、米国以外の国に所在する関係会社にとっては馴染みの薄い会計基準であり、正しい理解が得られないことがしばしばあった。一方、IFRSは100を超える国・地域で採用されており、今後も増えることが見込まれている。そのため、本社と関係会社との間で「共通のモノサシ」として機能することが期待され、連結ベースでの経営管理体制の高度化に資すると考えられる。さらに、関係会社が同じ会計基準を採用することにより、連結決算における調整作業の削減効果も期待できる。

また、財務諸表の「見え方」についても、メリットがあると考えている。

当社はIFRS第9号「金融商品」を早期適用し、一部の非関係会社の有価証券について「FVTOCI オプション」を採用しているが、これによって、当該有価証券を売却した際の損益が純利益に含まれなくなる。

従来米国基準では有価証券の売却損益が純利益に含まれており、売却損益の金額について、財務諸表利用者から毎期ご質問をいただいていた。これは、当社の財務諸表利用者は、有価証券の売却損益を一過性の利益と見ており、当該利益を控除した後の利益が、当社の「本業

による利益」と考えているためである。

この点、先述のとおりIFRSでは「FVTOCI オプション」を採用した有価証券の売却損益が純利益に含まれないため、損益計算書に「本業による利益」がそのまま表示されるというメリットがある。

4. IFRS 導入後に抱える問題意識

IFRS 導入の意義や狙いについては先述のとおりだが、IFRSが完全無欠の会計基準かという点、必ずしもそうではないと考えている。これは、IFRSについて今も多く改善プロジェクトが絶えず進行しており、形を変え続けていることから読み取れる。

ここでは、IFRSを導入した企業として、導入後に抱えている問題意識について触れたいと思う。

まず、先述したIFRS第9号「金融商品」で認められている、いわゆる「FVTOCI オプション」について考えてみる。「本業による利益」が表示されるという点については先に触れたとおりであり、日本企業特有のいわゆる「持ち合い株式」等、売却を前提としていない有価証券についてはこの処理が馴染みやすいと考えている。

一方で、視点を変えると異なる結論が見えてくる。典型的な例は20%未満の出資比率で資源権益への投資を行っている場合である。資源は有限なものなので、当然プロジェクト期間は有限であり、最終的には売却や清算といった形で投資を終えることとなる。しかし、「FVTOCI オプション」を適用した場合、プロジェクト途中で受領する配当金は純利益に含まれるものの、プロジェクト終了時の売却等による損益は純利益に含まれないこととなる。

資源権益への投資が当社の「本業」の一部を

為していることは明らかだが、果たして「FV-TOCI オプション」はこのような投資の成果を正しく表しているだろうか。投資の成果が正しく財務諸表に表れないことは投資の規律という面でも問題となる可能性があるため、再考する余地があると考え。

次に、ROE について考えてみる。これは IFRS 特有の問題ではないが、当社は IFRS への移行に伴い資本が増加した結果、米国基準と比して ROE が低下しているため、改めてこの点について触れておく。

IFRS への移行に伴って当社の資本が増加した主な要因は、IFRS では前述の「FVTOCI オプション」を適用した非上場有価証券について、その他の包括損益 (OCI) を通じた公正価値評価が求められるためである。OCI は ROE の分母である資本に含まれるため、分母が大きくなり、結果として算出される ROE が低下することとなる。

OCI には有価証券の公正価値評価による評価差額の他、海外関係会社に係る為替換算による評価差額等も含まれており、一時的なマーケット変動によって大きく変動する可能性がある。ここで疑問に感じるのは、資本の効率性を測る指標である ROE の分母に、株価や資源権益の価値、為替といった、一時的なマーケット変動の影響を受けやすい項目を含めるべきか、という点である。

資源権益への投資を例に考えてみると、資源価格が安い時期に取得した投資ほど取得コストが低い (使用した資本が少ない) 一方で、その後の資源価格高騰によって多くの利益を生み出しており、資本の効率性は極めて高いものと考えられる。この点、ROE の分母に OCI を含めると、現在の資源価格を元に公正価値評価した際的评价差額、つまり将来稼得する予定の未実現の利益が分母に含まれるため、算出される ROE が低くなる。

一方、資源価格が高い時期に取得した投資について、その後の資源価格の下落によって含み損となった場合は、上記の例とは逆に、ROE の分母にマイナスの OCI が含まれる結果、算出される ROE が高くなる。

上記のいずれのケースも、資源価格の一時的な変動により ROE が上下することとなってしまいが、ROE の分母に OCI が含まれることが、果たして本当に適切な「資本の効率性」を表しているのか、議論の余地があると考え。

なお、上記 2 点の問題意識は IFRS 第 9 号「金融商品」を早期適用していることに起因するものだが、EU では同基準がエンドースされていない等、日本以外で早期適用可能な国が限定的なため、現時点では実質的に日本で同基準を早期適用している企業に特有の問題といえる。また、上記の例に挙げた出資比率 20% 未満の資源権益への投資は海外の資源メジャーでは珍しい投資形態であり、日本の総合商社を含む一部の企業に特有の問題といえる点も付記したい。

5. 日本における IFRS を巡る動き

当社が IFRS 導入プロジェクトを推進してきたこの 5 年間、日本における IFRS を巡る情勢は大きく変化した。

2009 年には先述の「我が国における国際会計基準の取扱いについて (中間報告)」が公表され、IFRS 強制適用の機運が高まる中、連結財務諸表規則の改正によって米国基準の使用期限が設定されたものの、その後の民主党への政権交代もあり、2011 年には再度連結財務諸表規則の改正によって米国基準の使用期限が撤廃され、IFRS 強制適用の機運も大きく後退することとなった。

しかし、再び自民党への政権交代が実現する

と、昨年6月には金融庁が「国際会計基準(IFRS)への対応のあり方に関する当面の方針」を公表し、また自民党が300社程度のIFRS適用を中期目標に掲げる等、ここに来てIFRSを巡る動きは活発化している。

この動きの中で、現在企業会計基準委員会(ASBJ)では「修正国際基準(JMIS)」の公開草案を公表し、コメントを募集している。

「修正国際基準(JMIS)」はエンドースメント手続きを経て作成される会計基準であり、IFRSに修正を加える形で作成されている。国内市場では現在、日本基準、米国基準、IFRSの3つの会計基準が使用されているが、「修正国際基準(JMIS)」が完成すると、4つの基準が併存することとなる。この状況は世界的に見ても特異なものといえるが、日本として究極的には単一で高品質な国際的な会計基準が達成されることを目指す中で、国内でIFRSの適用を促進するための取り組みとして位置付けられており、過渡期的な対応と考えられる。

6. おわりに

先にも述べたが、当社のように多数の国・地域に跨って事業展開する企業にとって、IFRS導入の最大のメリットは、本社と関係会社とが同一の会計基準という「共通のモノサシ」を持つことで、経営管理の高度化に資する点である。

IFRSは現時点でも既に多くの国・地域で採用されているが、日本としてコミットしている「単一で高品質な国際的な会計基準」が実現すれば、そのメリットはより大きくなる。「単一で高品質な国際的な会計基準」という大きな目標の実現に向けて、引き続き関係者が積極的に行動することを切に願っている。

また、この目標の実現に向けて、日本としていかに関与・貢献していくかが、当社を含めた国内企業や関係者にとって、今後の重要なポイントとなってくると考える。基準開発に携わる皆様には、資金的・人的貢献もさることながら、質の高い意見発信を継続していくことで、日本としてのプレゼンスを高めていただくことを期待したい。